

## 西洋経済史A(坂出) 第3講 産業革命 2004年4月23日

### 先週のテーマ

- 第2講 農業革命-イギリス農業が、開放耕地制度を生産力的基礎とする領主-農奴関係から、農業革命を経て、どのように三分制に基づく資本主義的農業に変貌したか？
  - 1 開放耕地制度
  - 2 第一次囲い込み
  - 3 第二次囲い込み→三分制度の確立

### 本日のテーマと演習問題

- テーマ：なぜイギリスが「最初の工業国家」になったのか？あるいはこのテーマの陥穽
- 演習問題「イギリス産業革命の開始期と終結期を示す具体的指標をあげて、それぞれその根拠を述べよ」
- 「産業革命」論の系譜
- 産業革命「以前」と「以後」～大塚『欧州経済史』を中心に
- 分析視角-「産業」と「地域」

#### 【1】「産業革命」論の系譜

- ・ 産業革命の開始期
- ① トインビー：1760年（回転式蒸気機関、紡績・冶金の新技术の発明）  
（終期：1850年）-蒸気機関と力織機
- ② モテック：1780年代（1760年代・1770年代：準備期）
- ③ ロストウ：1783～1802年（「離陸期」 × 「産業革命」）
- ④ さかのぼる傾向  
ネフ：エリザベス時代の初期産業革命  
シュンペーター：1780年代以前の産業革命（+1840年代以後の産業革命）  
→産業革命とは何か？が問われる。

Louis-Auguste Blanqui(1837)フランスの論評家-隣国イギリスの劇的な変化  
エンゲルス(1845)『イギリスにおける労働者階級』

#### [1]古典的解釈（断続説）

➤ トインビー→ホブズボーム  
トインビー(1884)オックスフォード講義：人々の経済・社会状態を突然変化させた劇的な出来事  
ウェッブ夫妻-産業構造の転換が大衆の生活水準に及ぼす影響  
ポール・マントゥ(1906)『産業革命』  
ハモンド夫妻  
↓  
ドップ(1946)『資本主義発展の研究』  
ホブズボーム

#### [2]修正論的解釈（連続説）

1920・30年代：広範囲な一次資料（営業記録等）に基づく個別研究の進展

➤ クラップム→アシュトン

クラップム(1926-38)『近代イギリス経済史』3巻本

- ・「革命」は、実際には漸次的かつ局地的にのみ起こった歴史事象に過ぎなかった。
- ・一連の技術革新は国民大衆の生活水準を向上させた。

アーサー・レッドフォード

リブソン

アシュトン『産業革命』

●産業革命が労働者階級の生活水準の低下をまねいたかどうか？論争

悲観説（窮乏化）：マルクス・エンゲルス、トインビー、ウェップ夫妻、ハモンド夫妻

楽観説（変化を長期的にみると、労働者の所得は上昇し、生活水準の向上が実現した）

：クラップム、アシュトン、ハートウェル（「悲観説」「楽観説」はホブスホームによる）

→初期の社会的・思想的立場からする分析から、しだいに数量的分析へすすむ

[3]New Economic History（漸進説）

- ・1960・70年代のイギリス経済の不振「イギリス病（衰退）の起源と原因は？」

↓

- ・「革命」の存在そのものを疑問視

ニック・クラフツ(Nick F. R. Crafts)

- ・マクロ経済的分析（国民所得・工業生産高・資本形成率・生活水準・人口趨勢などについての全国レベルの集計的推定値）に基づいて経済成長と工業化を理解

パット・ハドソン『産業革命』

- ・18世紀後半から19世紀前半の社会変化を国民経済的視点での定量分析で把握することは不可能
- ・①この時期の統計データは不十分で信頼できない。
- ・②革新的活動の多くは集計的統計値にほとんど影響を与えないような小規模産業で行われた。
- ・③地域的な差異が多い（停滞地域・産業と発展地域・産業）→国民経済的集計的分析では平均化

→「地域的アプローチ(regional approach)」

- ① 地域的なデータは信頼性が高いものが多い
- ② 鉄道時代（1825年以降）以前は製品・生産要素市場のための国内市場は全国的には統合されていなかった。
- ③ 地域的な差異

【2】産業革命「以前」と「以後」～大塚『欧州経済史』を中心に

[1]産業革命の推進した近代的産業資本家がどのような階層から出現したか？

- ・日本の資本主義発達史をめぐる論争から出発

日本の近代的工業を推進した三井・住友は維新以前に商業資本として地位を築いていた。

①商業資本の産業資本への転化説（社会的系譜における連続説）

商業資本が重商主義のもとで資本を蓄積し、これを産業に投じて近代的産業資本へ転化していった。←アンリ・セー、クーリッシュェル、ポクロフスキー

②別な資本家の出現（社会的系譜における断絶説）

ピレンヌ『資本主義発展の諸段階』

マントウ：半農半工のヨーマン層

大塚久雄：ピレンヌ説の紹介→「近代的産業家は、中産的生産者層から主に出現した」

アシュトン：産業革命初期—家族企業か2・3人のパートナーシップ（利益の積立と再投資が企業拡大の原動力）

産業革命の進行：ロンドン商人が大きな役割

## [2]近代に独自の生産様式としての「資本主義」

資本主義「近代に独自の生産様式」（『欧州経済史』4頁）

生産様式「歴史の一定の段階に照応した、経済生活（生産↔消費）の根本的な社会的組み立て」（『欧州経済史』4頁）

資本主義の根本的特徴

- ① 商品生産が全社会的な規模にまで一般化しており、したがって経済生活の一般的な土台を形づくっている
- ② しかもそうした商品生産は、単純な独立の小生産者たちによるのではなく、資本家が賃銀労働者たちを雇傭して生産労働に従事させるという関係にもとづいて行われている（6頁）
  - ・ そのもとでは、社会を構成する個々人の生活需要もこのような生産関係（すなわち、商品生産という基礎的関係とその土台のうえに築きあげられている資本家＝賃銀労働者という階級的関係）の基礎の上にたって絶えず充たされていくのである。（『欧州経済史』7頁）

資本主義以前の生産様式

「経済生活の一般的な土台をなすものが商品生産ではなくて「共同体」（土地占取のための単位集団）である。諸個人は共同体の一員として土地を占取し、この土地によって生産活動を営み、生活需要をみたしていく」（『欧州経済史』8頁）

「資本主義」の歴史的に独自のゆえん

- ① 「資本主義」のばあい経済生活の一般的な基盤をなしているものは、もはや土地占取のための単位集団たる「共同体」などではなく、全社会的な規模にまで発達をとげるにいたった「商品生産＝流通」の関係である。
- ② このことに照応して、そうした基盤の上に築き上げられている階級構成の基本線もまた、もはや何らかの形での経済外的強制をともなう土地占取関係などでなく、資本家が賃銀労働者たちを雇傭して生産に従事させるという、あるいは、経済学的に正確に表現すれば、労働者が自己の労働力を資本家に商品として販売し資本家がそれを生産のために消費する（すなわち労働力の商品化!）といういわば純粋に経済的な関係である。
  - ・ このような基本的生産諸関係にもとづいて絶えまなく生産がとりおこなわれ、社会全般の生活需要がみたされていく、こうした近代に独自の生産様式こそが「資本主義」とよばれるものなのである」（『欧州経済史』20・21頁）

## 【3】分析視角- 「産業」と「地域」

○ [1]なぜイギリスが「最初の工業国家」になったのか？

- ① なぜアジアでなくヨーロッパで
- ② なぜスペイン・ポルトガルでなくイギリスで
- ③ なぜフランスでなくイギリスで

● 諸要因: Taylor, pp.46-47.

- 1) 原材料-石炭と鉄鉱石の自給
- 2) 人口の急速な増大-市場であり、労働力の供給源
- 3) 海外領土の拡大-原材料の供給
- 4) 運輸手段の発達(道路・運河)
- 5) 企業家に融資する金融セクターの存在
- 6) 科学技術の産業への適用
- 7) 政治的安定(←→フランス)
- 8) 上記の条件をすべて満たしていたのはイギリスだけであった。

ウォーラステイン「世界システム」論

Why→How

地域

↓

- [2]なぜランカシャーが「最初の工業地域」になったのか？

小括

- 第2部 イギリス産業資本主義確立過程

➤ 毛織物・綿工業/石炭・製鉄業/鉄道業・造船業の地域・産業連関的発展プロセスの検討  
次回のテーマ

- 5月7日：第4講 毛織物工業とマニュファクチュア(4月30日 休講)
- 大塚久雄『欧州経済史』2章1
- 堀江英一『経済史入門』5章
- スミス『国富論』1章分業について、2章分業を生む原理について
- マルクス『資本論1巻』11章協業 12章分業とマニュファクチュア
- 演習問題「マニュファクチュア-の歴史的意義について、問屋制度との対比において論ぜよ」

補遺：前回のスライド

第2講 農業革命 2004年4月16日

先週のテーマと演習問題

- 講義概要と進め方
- 「Population=人口」か？
- 演習問題「第二次囲い込みを第一次囲い込みと対比させて論ぜよ」

本日のテーマ

- イギリス農業が、開放耕地制度を生産力的基礎とする領主-農奴関係から、農業革命を経て、どのように三分制に基づく資本主義的農業に変貌したか？
- 開放耕地制度
- 第一次囲い込み
- 第二次囲い込み

【1】開放耕地制度

- [1]三圃農法と開放耕地制度
- [2]封建的危機と農民一揆

【2】第一次囲い込み

- [1]農民的囲い込み  
- 開放耕地制度を破壊
- [2]領主的囲い込み

【3】第二次囲い込みと農業革命

- [1]「農業革命」1750-1850
- [2]第二次囲い込み（「議会囲い込み(Parliamentary Enclosure)」）
- [3]第二次囲い込みの社会経済的影響

小括

- 三分制度の確立
- 近代的地主→地代
- 農業資本家→利潤
- 農業労働者 → 労賃

来週のテーマ

- 4月23日：第3講 産業革命
- 大塚久雄『欧州経済史』1章
- 堀江英一『経済史入門』7章1
- 演習問題「イギリス産業革命の開始期と終結期を示す具体的指標をあげて、それぞれその根拠を述べよ」（松田智雄編『西洋経済史』188頁（井上巽））

**industrial revolution** In 1837 Louis-Auguste Blanqui used the phrase to describe the changes Britain had undergone during the previous half-century in her social and economic life. Widespread use of the term followed from Arnold Toynbee's *Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England* published in 1884. Debates about the precise period and its meaning reflected efforts to identify what brought about the transformation from a predominantly rural society, whose major source of livelihoods derived from the land, to a rapidly urbanizing country whose wealth came from commerce and manufacturing.

Symbolic of the industrial revolution was the use of coal as a source of energy. The conversion of coal to coke made cheaper iron ore smelting possible and simultaneously produced town gas, used from the early 19th cent. for lighting. Coal-fuelled boilers provided steam-power for mines, drainage, factory machinery, and locomotives, making speed and repetitive activities less arduous and greatly augmenting output. Particularly associated with such changes were cotton textiles, made cheaply in large quantities.

Social changes occurred simultaneously. Many new jobs were created between the late 18th and the mid-19th cent. from the ever-widening applications of technical innovations such as in gas-making, in the chemical industry, in canal and railway transport, and in textiles. New methods of

industrial production also required many people to move to urban locations. Some existing towns such as \*Manchester expanded very rapidly, whilst new towns emerged, such as St Helens (Merseyside). Rapid urban growth posed many unforeseen problems of overcrowded houses, inadequate sanitation, and law and order.

Many historians, geographers, and political economists have sought to explain the origins of the changes during the second half of the 18th cent. and why they should have occurred in Britain. The search for one main underlying cause has led to elaborate and careful studies of both economic activities and social developments, including geographical determination, religious discrimination against nonconformists, technological innovations in sources of power, and the rise of literacy.

In contrast other historians have challenged the very concept of an industrial revolution. For example, econometric techniques applied by N. F. R. Crafts and others indicate slow rates of change in British economic life. Innovations in technology and in organization occurred piecemeal in different parts of the economy, suggesting that the image of revolution seems inappropriate.

**yeomen** Legally a yeoman was a freeholder who could meet the qualification for voting in parliamentary elections, but the term came to be employed more widely than this, to encompass freeholders, copyholders, and sometimes even tenant farmers. In 18th-cent. Cumbria, freeholders, customary tenants, and tenant farmers were all encompassed by the term yeoman, while in other parts of the country it was virtually unknown. In 1566 Sir Thomas \*Smith defined his fellow-Englishmen as gentlemen, yeomen, and rascals. By the early 19th cent. a slightly narrower definition seems to have been gaining ground. For the agricultural writer Arthur \*Young, yeomen were only freeholders who were not gentry, and the same definition was used by witnesses before the 1833 Select Committee on Agriculture. Since the 1960s historians have increasingly

eschewed the word because of its romantic and sentimental overtones, as the sturdy inhabitants of a long-departed rural idyll.

Oxford

Dictionary of British History